



(吉野山)

奈良・坂田寺跡

さかたでら

- 1 所在地 奈良県高市郡明日香村祝戸
- 2 調査期間 二〇〇二年(平14)一〇月～二月
- 3 発掘機関 明日香村教育委員会
- 4 調査担当者 相原嘉之
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 飛鳥時代～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

坂田寺跡は、稲淵宮殿跡と飛鳥川を隔てた対岸(右岸)に位置する。創建年代については諸説があるが、鞍作氏の氏寺として七世紀

前半に創建され、飛鳥寺と並ぶ最古級の古代寺院と考えられている。朱鳥元年(六八六)には官大寺とならんで天武天皇のために無遮大会が催されるなど、七世紀を通じて有力な寺院であった。七世紀の伽藍跡は未発見であるが、出土土器

や瓦からその存在は確実視されている。

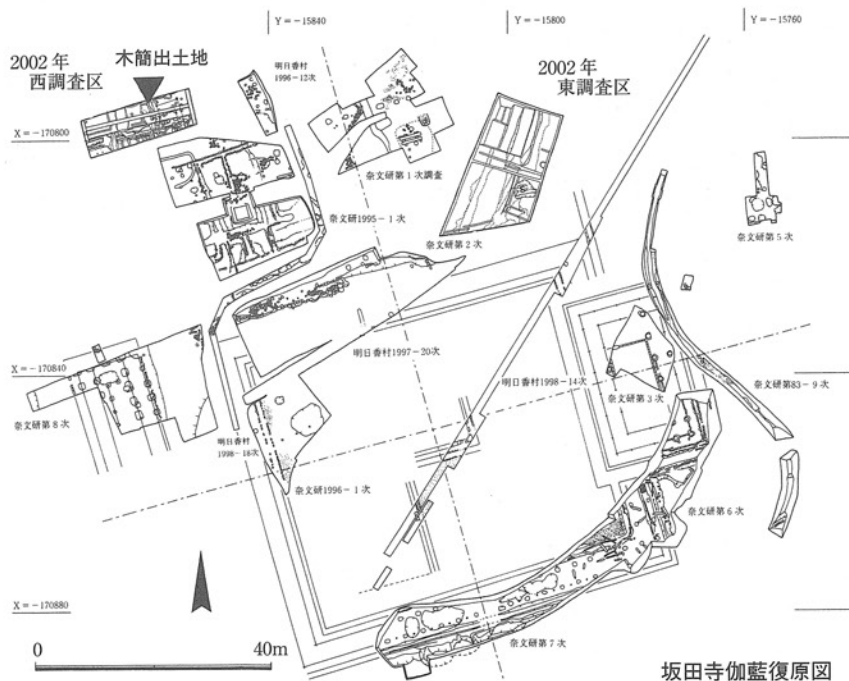
一九七二年以降奈良国立文化財研究所・明日香村教育委員会によって実施された発掘調査によって、八世紀の伽藍配置が判明している。伽藍は飛鳥川に向かう傾斜地を雛壇状に造成した平坦面に立地する。一辺六〇m四方を回廊で囲み、その東辺に金堂が取り付く。

回廊の内側にも基壇建物が建ち、中門は北面回廊に開く。回廊の北側には井戸や石組溝があり、木簡や墨書土器が出土している(第一・二次調査。193頁参照)。この伽藍は一〇世紀後半に倒壊、埋没した。

今回の調査地は寺域の北辺近くにあたり、第一・二次調査地に隣接する場所である。調査の結果、奈良時代の伽藍造成土上面で、掘立柱建物・堀・石組溝・素掘り溝などの遺構を検出した。建物や石組溝は伽藍方位と一致しており、一連の造営であったことがわかる。また、造成途上に掘られた溝一条を検出した。この溝は伽藍造成完了時点には既に埋まっており、造成工事に伴って一時的に機能した溝とみられる。埋土には炭が大量に入っており、伽藍の造営中に炭化物の投棄が行なわれていたことが判明した。

出土遺物には、奈良時代から平安時代の瓦、和同開珎一点や、仏具と考えられる球形中空の銅製品などがある。墨書土器が造成土直上から四点(全て八世紀前半)出土しており、椀・皿の底部に「金」「知」「知識」「知識饗」と記される。

木簡は伽藍造成中に掘られた溝よりも古い堆積土から一点出土し



坂田寺伽藍復原図

た。この堆積土が造営直前の土層であるのか、造成土であるのかは今後の検討が必要である。

今回、及び第一・二次調査の成果から、この付近には厨に相当する施設があったと推測できる。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「醬五升 不乃理五升



(165)×23×6 019

上端は方形、左右側面も原形をとどめる。下端は折損。食料品とその数量を一定の間隔をおいて記す。「不乃理」は海藻のフノリで、平城宮・京跡出土木簡には「布乃理」「布乃利」と記す例がある。

正倉院文書では「不乃利」「布乃理」などと記され、計量単位は重量(斤両)と体積(斗升)の両方の例がある。小振りの楷好な筆跡で、調整も丁寧であることから、帳簿などではなく食料品請求文書の類とみられる。裏面は平滑に削って仕上げているが文字は確認できない。

9 関係文献

明日香村教育委員会『明日香村遺跡調査概報 平成一四年度』(二〇〇四年刊行予定)

(1) 7・9 相原嘉之、8 竹内 亮(奈良文化財研究所)

